

真夜中の熱帯雨林でみた オオミツバチのハニーハンティング — マレーシア BEENET 会議参加報告 —

佐々木 正己

Beenet Asia 主催の国際会議, Tropical Bees and the Environment の概容と, 会議に先立って見学した Bee Tree (数十のオオミツバチコロニーが梢に群棲している巨木), そのハニーハンティングの様子について報告したい。

1. 国際会議

会議は1995年3月12~15日, マレーシア半島はタイ国境に近いアロスターの東, 熱帯雨林の中に開けた Ped Lake 湖畔に新設された Holiday Inn にて開催された。後述のイベント見学の魅力もあってか盛況で, 口述発表が42題, ポスター14題, 参加者数は31か国120名。主催者 Prof. Mardan (マレーシア農科大) が選んだ会場は, 街から遠く離れたジャングルのまっただ中に一軒だけというホテル。まるで合宿をしているようなもの。親睦を深めるには大変便利であった。

初日, 歓迎スピーチに続いていきなり始まったのが, マルチメディアによる発表 “Honey Gathering: A Malaysian Tropical Adventure”。映画を見ているような迫力の画像と音声で, 大きなスズメバチが飛び回り, ミツバチを追いかけて, カーチェイスならぬビーチェイス? が始まる。ジャングルの中を右に左に逃げるミツバチ。巨大な大顎を噛みならしながら追いかけるスズメバチ。しかしスズメバチは大きなクモの網にかかり, ミツバチは無事に巣に帰り着く。実はこれがCG (コンピュータグラフィックス)。このコンピュータを駆使した新しいスタイルの学会が今回のもくろみの一つ。そもそも学会の直前まで事務局からEメール(最

近発達著しいインターネットシステムを使った電子通信)が届き, 会場でも自由にこれが利用できるコーナーを設けるなどのサービスが提供されていた。発表の方法も, 従来からのスライドによるものに加えて, 何人かは自分でマウスを使って手元のディスプレイの画面のボタンをクリックしながら講演を進めた(図1)。会議の記録の方もプロシーディングスのほかにCD-ROM版も作られることになっている。

印象に残った講演や参会者をひろうと, まず E. Crane 博士の基調講演 “Bees, Mankind and the Environment”。女史の衰えを知らないバイタリティーと視野の広さに改めて敬服。N. Bradbear は Sustainable Beekeeping の必要性と難しさを訴えた。玉川大学になじみの深い Woyke も健在。中国からは中央研究所の Yang 氏が来ており, 旧交を温めることができた。韓国の Woo 教授らのポスター発表はミツバチトゲダニ (*Tropilaelaps clareae*) がアツという間に韓国全土に広がってしまったというショッキングなもの。このことは今まで熱帯に限られると思われていたこのダニが, 日本にも蔓延しうることを示すもので, まだ不明の点が多いものの, 防疫上十分な注意が必要である。

懐かしい人達としては, Koeniger 夫妻, Rinderer, Buchmann, Kevan, Otis, Roubik, Oldroyd, Schmit, Punchihewa, Reddy, Muid の各氏らがあり, フィリピンの Cervancia さん, IBRA 会長の Matheson 氏には初めてお会いした。私が一人きりだったのに対し, 韓国の Woo 教授は大学院生2人を連

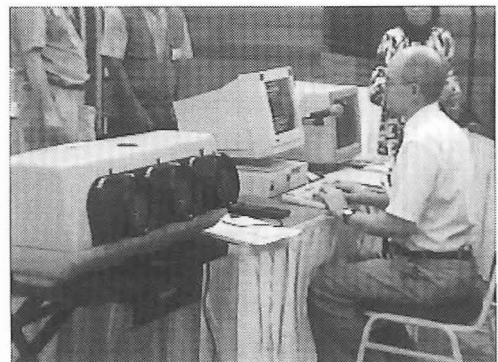


図1 マルチメディア機器を駆使しての発表を前に動作チェック中の Bromenshenk 氏。

れてきており、2人とも英語で立派に発表や質疑をこなしていたのには考えさせられるものがあった。

私自身は、キンリョウヘン（東洋ラン）によるニホンミツバチの誘引とポリネーションについて、これまでの一連の研究成果をビデオ映像にまとめて発表した。コンピュータで作成した画面を直接精細な画像のままビデオに取り込み、動画の中にちりばめて持って行きたいと考えていたが、学内ではまだそれを実現できる設備がなく、今回は断念せざるを得なかった。しかし雄蜂が群がってランの花のまわりを飛び回ったり、実際に花粉を付けている場面は、大いに興味をひいたようで、多くの方からテープのコピーをもらえないかとの要望を頂いた。

会議の最終日、今回の主催団体の Beenet Asia の今後の活動方針を討議した中で、私たちの AAA（アジア養蜂研究協会）の活動との調整あるいは“住みわけ”が話題に上った。これに対し主催者の Prof. Mardan は、1) 研究は大切であるが、アジアの各地域ごとにきめ細かく養蜂振興を進めることが第一で、研究はそれについてくることが望ましい、2) 立派なセンターなどを新設するより、現在ある体制を有効に生かし、情報交換を密にしてネットワークを組み、連携を深めていきたい旨を表明した。

2. 真夜中のジャングルツアー

学会前日の3月11日、期待に胸膨らませた一行は、数台の車に分乗してジャングルの中へ。湖畔では残念なことにゴルフ場の開発が急ピッチで進んでいて、鬱蒼とした木立や蔓をブルドーザーが無惨にも引きちぎっている。数年後、日本のゴルファーが大挙して訪れることになるのかと思うと、物言わぬジャングルの悲しみがひしひしと感じられた。ホテルから10分ほど走り（実はこのすぐ近くに翌朝、野生のゾウの群が現れた!）、夕闇せまるジャングルのなかの小径を登ること約40分。乾期に入っていて、ジャングルのなかは意外に乾燥している。日本では考えられない大木が林立する中、ひときわ高い巨木が目的地。地上50mの梢に50を



図2 巨木の枝にぶる下がるように並ぶオオミツバチのコロニー。全部で52個数えられた。

図3 松明の火の粉と煙で巣から蜂を追い払ったところ。大型フラッシュがたかれた時のコマから焼き付けた。

越えるオオミツバチの巣がその威容を現した。巣は直径1mを越え、その規模からみて一つの巣で5~6万匹はいると推定される（図2）。双眼鏡や20倍のビデオカメラでのぞくと、そろそろ沈もうとしている夕陽に、びしりと重なり合った無数の蜂が黒々と浮かび上がって見える。ジャングルの林床におもいおもいに陣取って見上げる中、日没を迎えるとコウモリが飛び交い、金属音に近い奇妙な声で鳴くセミ、鳥、獣のBGMが何ともいえない。陽は沈んでもまだ蜂の巣はシーンとしている。観客は息を殺して遙かな梢を注視している。と、双眼鏡の視野に突然無数の蜂の乱舞が始まった。これが例の「イエローレイン」（ジャングルの中でえたいのしれない黄色い物質が降り注ぐことから生物化学兵器ではと、世界的に話題になった）。実はオオミツバチの集団排泄。黄色いのは花粉の色だ。さらに、なんとこんなに暗くなってから、雄バチ達の集団結婚飛翔が続く。数十万、否、

もしかしたら数百万匹のミツバチ（飛ばないものも含めるとこの木だけで推定 250 万匹）の鈍い羽音がウオーンと 50m の樹冠から降り注ぐ。もう真っ暗で何も見えなくなったころ、いつのまにか月が煌々と照り、巨木達が違った印象を与えている。

懐中電灯の明かりを頼りに、しばらく山道を下り、ジャングルの中にしつらえた簡単な休憩所で弁当を食べ、しばしのディスカッション。配偶行動の専門家、ドイツの Koeniger 教授の解説を聞く。そして真っ暗な中、今や心地よく響くようになった BGM を聴きながら待つこと 4 時間。これからがメインイベント。午前 2 時。月が沈み、木の間隠れに星だけが見えるなか、再び巨木の下へ。松明が準備され、山の神に感謝する祈りの後、3 人のハニーハンターが簡単な梯子様の足場をつたって（図 3）梢へと音もなく登っていく。すごいスピード。下の者との連絡の合図（マレー語）が真夜中のジャングルにこだまし、50m の梢から松明の火の粉が長い尾を引いて散ると、再びウオーンという鈍い羽音（図 3）。火と煙で巣から追われた数万の蜂達が真っ暗な夜空にさまよっているのだ。真っ暗になるのを待ったのは蜂の攻撃を避けるため、ハンター達は面布をつけていない。しかし相手は闇にも強いオオミツバチのこと、ハンター達も少なからず刺されているに違いない。こうして蜂を追ひ払った巣からは、蜜のたっぷり入った部分が切り取られ、籐で編んだ籠で下まで降ろされる。蜜は甘く、ジャングルの香がするような気がした。暗くて樹上の作業をつぶさに見ることは不可能だったが、それはそれでよかった気がする。

今回は特別に、同じ木に営巣しているコロニー間に互いに血縁関係があるのか否かを DNA 解析から調べるため、オーストラリアの Dr. Oldroyd が蛹を冷凍して持ち帰るという調査も兼ねた。ハンティングが終わってジャングルを降りる頃にはもう東の空が白みかけていた。

学会の後はしばしのプライベート旅行とし、ランカウイ島に渡り、ジープを借りて山中でネットを振ったり、珊瑚礁の島でスキューバダイ



図 4 ハニーハンターの Salleh Mohd Noor 氏（右）と「Beekeeping & Development」の発行者 Nicola Bradbear さん。

ビングにトライしたりした後、中部のタマンヌガラ国立公園へ。ここは有名で、比較的安心してジャングルを満喫できるが、最奥のグヌン・タハン（山の名）までは 50km、行くとなればすべての装備を背負って一週間を要する奥行きを誇っている。動物観察用の無人小屋に泊まった夜、巨大なホタルをみつけたのが、ここでのハイライト。一匹手に載せておけば（体長 6 センチ以上、かなり重い）、時計が読めるどころか、それだけで手紙が書けるという代物であった。あとは熱帯の蝶、変わったアリジゴク、色とりどりのカワセミ類、サソリ、ヒル、おびただしいコウモリ…。

今回はいつも持参のカメラをやめて、8 ミリビデオを試してみた。接写から 20 倍の望遠まで楽に撮れたし、ジャングルのなかの BGM などの音声もよく入り、便利であることを実感した。ちなみに本稿の写真は画質が悪いが、皆ビデオからプリントしたものである。

〒194 町田市玉川学園 6-1-1 玉川大学